

《第 470 回（2020 年 1 月 9 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『ぼくがゆびをぱちんとならして、きみがおとなになるまえの詩集』 齊藤 倫／著 高野 文子／画 福音館書店

今月の課題図書は詩の本です。20 篇の詩が、おじさんの「ぼく」と小学生の「きみ」の交流を通じて紹介されています。

日々のちょっとした出来事や、素朴な疑問についておしゃべりをするために、「ぼく」の家に遊びにくる「きみ」。「ぼく」は、部屋に積まれているたくさんの本の中から、そのときの「きみ」にぴったりの詩を差し出します。

「ぼく」と「きみ」の何気ないおしゃべりの中には、言葉の本質に迫るものがあるように感じます。紹介されている色々なジャンルの詩と、二人のありのままの会話を通して、言葉の不思議さ、楽しさが自然と読み手に伝わってくるような本です。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想を紹介します。

●不思議な話。分かってやうとすること、考えること、捉えることの大事さが書かれていた。自分は詩が苦手。自分の本心が向こうに見え透いてしまう気がして、斜に構えた読み方をしてしまう。「ことばのすきま」という表現があったが、詩そのものがそうなんじゃないかと思う。作者の他の作品を読んだときに、不思議な感じ、何が言いたいのか分からない感じがかった。作者が詩人であることを知り、作品のベースに色々な詩人の詩があったということが分かった。

●すごくよかった。高校生の頃から詩を書いていて、大学で本格的に詩の勉強をした。読んで、「詩」とは何かを考えた。詩には技術がある。この本は、詩をやさしい次元でとらえているので、詩の入門書として良い。載っているのは、日本の有名な詩人 100 人になるような人の詩。こどもに、詩を難解なものではなく、取っつきやすいものとして受け止めてもらえるのでは。大人になる前の「きみ」に、伝え方を工夫して書いているんだなと思った。

●この本を紹介してもらえて本当に良かった。言語学を専攻していただけて引き込まれた。何気ない言葉にぐっと焦点を当てると面白さがある、ということを教えてもらえる。オノマトペは、色々な表現があって、人それぞれ聞こえ方は違うよね、と思った。30 ページの「ことばのいみなんで、わかりはしないけど、わかって

としなくていいわけじゃない」という一文が良かった。ある場面を、その場にいる人同士で一致した認識として共有する、ということには面白味がある。

●詩が苦手な、構えてしまう。読み手の力量も必要とされるし。どうしても自分のバックボーンを前提に読んでしまうので、作者の伝えたいことを自分は汲み取れているのかと考えてしまう。詩は、リズムカルなのが好き。載っている詩は、どれも状況が分かるので、ちょうどいいのを選んでいようかなと思う。こどもがどう読んで、どう感想を持つんだろうか。自分はこどもに戻れないから、聞いてみたい。作者の伝えたいことが、どれだけこどもに伝わるんだろうと気になる。

●気に入った本だったので、みんなで読んでみたいと思った。読み通すのが大変かと思ったが、詩の間に本文があると読みやすくて、途中で飽きることがなく読めた。こどもの頃の会話を思い出した。意味のない話も、今思えば深い疑問かも。こどもと話すと、大人もハッとさせられる。こどもの「きみ」の質問にたいして、大人の「ぼく」が時間をもらって考える姿勢がいいと思った。詩って結構面白い。苦手意識はもったいない、と思った。

●大人の「ぼく」とこどもの「きみ」のお話の中で詩が登場するので読みやすかった。詩はよく分からなくて難しいが、詩が嫌いかと言うとそうでもない。教科書に載っていた詩は 50 年たった今でも、そらんじる事ができる。こどもの私の心にその詩の言葉が刻み込まれ、時々フツと湧き出てくるように思う。言葉って難しい。この本の中の詩も理解不能と思うものがあるが、「まつおかさんの家」と「一生が一時間」は胸にぎゅっときた。

第一木曜日の
開催です！

次回 2月6日(木) 10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ソングの見た星 路上で生きぬいた少年』

リ・ソング、スーザン・マクレランド／著、野沢 佳織／訳 徳間書店